

保育園は地域子育てセンター。「関係者お互いのメリットを生かしながら子どもたちと一緒に豊かな農業体験を」

地域の農業青年や有機野菜グループ、老人会まで、小鳩の家保育園の子どもたちが取り組む教育ファームのためにネットワークが広がる。農業青年たちは、子どもたちに農作業を指導するかたわら、お迎えのお母さんたちに自分たちの野菜を売り、老人会のおじいちゃんたちは子どもたちと一緒に農業体験に生きがいを感じ、そしてもちろん子どもたちは、お兄さんおじいちゃんたちに見守られながらの農作業に大喜びだ。

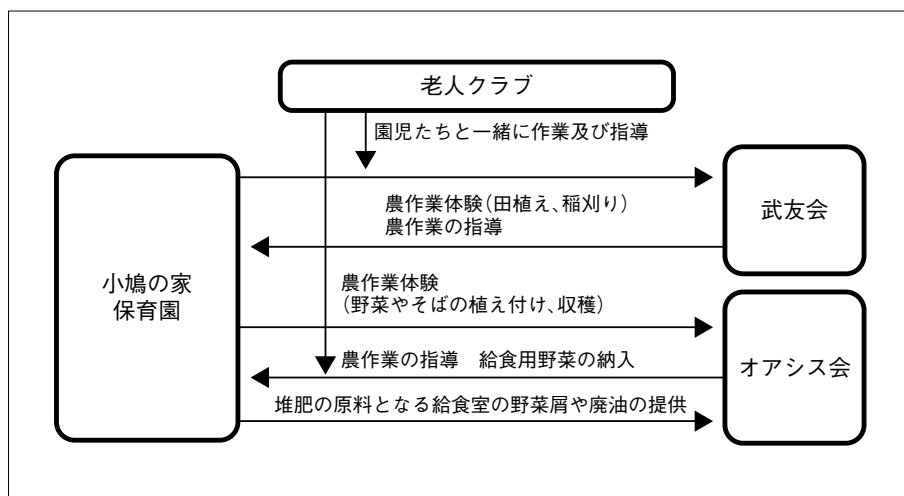
小鳩の家保育園

取組主体

- 名称：小鳩の家保育園
- 担当窓口
担当課(者)：井上 一夫
住所：佐賀県武雄市武雄町大字武雄5248
電話・FAX：0954-23-3355
E-mail：kaze@lime.ocn.ne.jp
- 団体等の属性：学校(保育園)
- 連携団体及び協力団体：
属性：農林漁業者、その他(老人クラブ)
内訳：武友会(武雄市農業青年団体連絡協議会)、オアシス会(有機野菜栽培グループ)、武雄区老人クラブ



田植え風景



取組地域及び地域の特徴

取組地域：佐賀県武雄市

地域の特徴：

武雄市は佐賀県西部に位置する人口5万2000人の“いで湯と陶芸の町”である。地形的には、佐賀県の二大河川である松浦川と六角川の源流域に位置し、松浦川水系はその中山間地の地形条件を生かし、牛豚畜産と野菜類を生産する一次産業の盛んな地域である。

一方、有明海側に流れる六角川水系は、森林率37%と全国平均(66%)の半分程度の率だが、それだけ水田面積が大きいという意味でもあり、下流部の白石地区を中心に農業県佐賀を代表する穀倉地帯を形成している。

取組内容

(1)目的(目標)

“風の子を育てよう緑と光の中で”を保育テーマに、周辺の自然環境・歴史環境を幼児期に実体験させることで、豊かな感性を育み生きる力を醸成する保育を展開している。そのなかで農の体験は自然体験そのもので、農の周辺の多様な生物に出会えることで豊かな感性を育むことができる。食の体験は、昔に比べ家庭での生活体験が消えていくなか、生産から調理・食卓までの一つの流れを体験する事は、仕事を進める上での計画性や積極性などの基礎基本を体得し、自然環境や食べものを大切にするとともに、仕事に前向きな人間としての基礎を培ってくれる。

(2)取組開始時期：経緯

- ・1970年に武雄市の農業青年グループ4Hクラブが、保育園に「餅つき慰問」に訪れたことから交流がスタートしている。
- ・1990年から武友会(前4Hクラブ)と協働で、田植え、稲刈り、餅つきの「どろん子フェスティバル」三部作を始めた。
- ・2007年から、有機野菜栽培グループのオアシス会との連携で保育園給食室の野菜屑や廃油などを堆肥材料として会に提供。それを堆肥化しそこで生産された減農薬野菜を、給食の食材として購入している。
- ・2008年から園近辺に野菜畑を借り上げ、園児による無農薬野菜の農作業体験を始めている。農作業の指導はオアシス会のメンバーをお願いしている。
- ・同時期に武雄区老人クラブと連携し、野菜畑の農作業全般の仕事を指導してもらっている。

(3)対象作物

米、野菜、果実、その他

作物名・種類：ハクサイ、ニンジン、ダイコン、ソバ、サツマイモ、ジャガイモ等

選定理由：主食の米、夏野菜・冬野菜に分けて多品種を選ぶ。

(4)具体的な取組内容

「どろん子フェスティバル」

武友会の農業青年が子どもたちを指導しながら、6月に田植え、10月に稲刈り、12月には餅つきを行なう(どろん子フェスティバル三部作)。

今年から園内に体験田(田んぼビオトープ)を整備し、黒米を栽培してイネの成長の過程を園にしながらにして学習し、農閑期には生物の棲む場所として子どもたちの自然観察の場所になっている。

「元気野菜栽培」

2008年度から農水省の「教育ファーム推進事業」が始まり、保育園ではこのプロジェクトに応募し、2008～2009年度と事業採択され財政支援を得た。保育園から歩いて5分の場所に5アールの野菜畑を借り入れ、野菜づくりの指導をオアシス会が行ない、春野菜と秋野菜の二回に分けて栽培している。種蒔きや苗植えから、野菜が成長していく過程や収穫の喜び、調理の工夫や食卓の楽しさ、作物の成長から食卓までの一貫した流れを体験できる。

さらに、幼児と老人の交流(幼老連携)をねらいとして、武雄区老人クラブと連携。借り上げた野菜畑の体験作業を老人クラブの方に手伝ってもらい、老人一人に子ども一人のマンツーマンで、根気のいる草取りなどの作業を子どもたちのペースに合わせて優しく気長に指導していただいている。

また、老人クラブが、春野菜を収穫したあとの畑に、石灰と堆肥を入れて次の農業体験に向けた土壌改良を行ない、秋野菜の植え付けの準備をさせていただいている。

また、借り上げたほ場での農業体験の他、オアシス会のメンバーの畑でも野菜や果物植え付けや収穫の農業体験を行ない、オアシス会のメンバーから指導を受けている。



元気野菜

(5) 年間スケジュール

「どろん子フェスティバル」

6月：田植え 10月：稲刈り、12月餅つき

「元気野菜栽培」

春野菜 5月：種蒔き 8月：収穫

秋野菜 9月：種蒔き 12月：収穫

(6) 参加者数・属性の実績及び推移

園児と保護者

園児90名 保育士18名 お父さん役員会15名

武友会7名 オアシス会10名 武雄区老人クラブ約10名(平均参加者数)

(7) 経費

保育の一環として保育園で負担（2008～2009年度教育ファーム補助、2010年度佐賀県ふるさと先生助成）。

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

武友会とは、40年前に前身の4Hクラブのメンバーが保育園に餅つき慰問を行なったことをきっかけに交流が始まり、20年前から餅つきに田植えと稲刈り体験を加え、田植えから食べるまでの一連の実体験の取組みを「どろん子フェスティバル」として行なっている。

オアシス会とは、2007年に佐賀県主催の食育シンポジウムで意見交換を行なうなかで、オアシス会の有機肥料を使った野菜の栽培方法を聞き、保育園給食室の野菜屑や廃油などを堆肥材料としてオアシス会に引き取ってもらい、給食の食材としてオアシス会がつくった元気野菜を購入するという地域連携が始まった。その後、2008年度から保育園の近くに元気野菜の畑を借り入れ、オアシス会のメンバーの指導を受けて、園児が野菜

栽培の農作業体験を行なっている。

武雄区老人クラブとは、元気野菜の畑が武雄区の公民館の近くにあり、公民館にたびたび来られる老人クラブの方たちが園児の活動を見かけ手伝いを申し出てくださり、元気野菜の植え付けや収穫等の農作業を園児と一緒にこなうようになった。



田植え風景

●連携を進めるに当たっての課題と対処方法(ポイント・工夫)

〔取組みにおける工夫点〕

通年での取組みと農作物の「旬」についての理解を促すため、旬の時期が異なる春野菜と秋野菜の2回に分けて栽培している。

保護者参加の取組みを実施する場合は、参加しやすい土曜日に実施するようにしている。

園内に黒米の体験田を整備し、園児たちが日常的にイネの成長過程を観察できるように工夫している。

農作業体験だけでなく、収穫祭や収穫した野菜を活用した料理体験、米の場合は餅つき体験を実施し(保護者同伴)、種蒔きや苗植えから収穫の喜び、調理の工夫や食事の楽しさの一貫した流れが体験できるようにしている。

〔連携の工夫点〕

連携している団体等とは日常的に連絡を取り合い、コミュニケーションを密にしながら、取組みの日程等についてスケジュール調整を行なっている。

連携した取組みの実施においては、一部の関係者に偏った負担にならないよう、お互いが取組みのメリットを享受できるよう工夫している。

具体的には、オアシス会との連携では、園内に「元気野菜のテラス販売所」を不定期に設置して、オアシス会が生産した元気野菜を園児の送迎で訪れる保護者が購入できるようにしている。また、併せて園児の給食にも野菜等を納入してもらっている。

老人クラブとの連携では、農作業や収穫祭などで年配者の知恵や経験を積極的に生かしながら園児たちの指導を行なってもらうことで、生きがいや健康づくりの一環になっている。

園の給食室において発生した野菜屑や廃油は堆肥の原料として、オアシス会に引き取ってもらっている。

保護者に対しては、活動に対しての理解を深めてもらうために、園児が収穫した野菜等を家庭に持ち帰り、食卓で活用してもらうようにしているとともに、収穫した野菜を使った料理教室を保育園で実施している。

〔取組の課題と対処〕

より一層、食育を推進していく上では、農作業に理解があり実際の作業ができる専門性のある保育士の養成が必要である(財政的支援)。

現時点では、人件費等の限界があり保育士の増員は難しい。今後とも生産者や老人クラブなど、地域の方々

と連携・協働していくことが重要であり、園長のリーダーシップが問われている。

●安全管理

園近辺への移動は徒歩を基本にしており、徒歩で行ける田畑以外への移動は車で10分程度なので、保育園管理者の車2台で送迎している。

手洗い、足洗いやトイレなどは、近くの公共施設（公民館や国土交通省国土維持事務所など）にお願いしている。

これまでの成果

農や食の作業を関係団体の大人たちと協働していく過程は、子どもたちに実体験の成果として刷り込まれ、豊かな感性を醸成してくれている。さらに、運動会やお遊戯会など園の年行事の取組みでも、プログラムを進めるなかで協力して作業を行なうなど、社会性の面からも教育ファームの成果が見え始めている。

保護者については、イモ掘りなど保護者参加のプロジェクトは、レジャー感覚と収穫物の成果で多くの参加があり、収穫物がすぐに食卓に上ることによって家庭の会話も明るく弾んでいるようだ。

園の給食や家庭の食卓で、子どもたちが自分でつくった野菜を好き嫌いなく食べるようになった。

今後の構想、課題

保育園は「地域子育てセンター」としての役割を担うことを求められている。教育ファーム等の農関連事業を進めることで、多様な近隣の関係者との交流が広がり、その連携・協働のなかで、結果として「地域子育てセンター」として、オープンな保育園運営につながっている。幼児期における食農教育の大切さは、教育ファームを実践することで学習することができた。あとは長期的視点を持ち、その効果を、保護者をはじめ周辺関係者や行政の理解を求めていく必要がある。IT機器の発展に見られるように、ファスト化する子育てや教育は、子どもと家庭を追いこんでいる。スローな農体験こそ、次代を担う国際的人間育成に最適の幼児育成プログラムと思う。



キュウリの収穫

小鳩の家保育園

みんなのコメント集

取組の
実践者

「オアシス会の“元気野菜のテラス販売所”を日常的に園内に設置し、野菜を保護者に販売して、家庭で料理の材料に使ってもらうようにしたいです」

「武友会の若手農家が生産している農産物も、保育園で直売することができればと考えています」

「安全な食材であれば、見栄えは二の次」

「労働人口の減少や経済のサービス化で女性の労働力はますます求められてきています。忙しい家庭の食をサポートするには、子どものお迎えに合わせて野菜が買える、そのような複合的サービスを保育現場でも始めるべきではないかと考えています。農業の六次産業化が起こり、地域がつながればそんなに難しいことではないと思います」



ピーマン大好き